

令和5年度「カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業」事業実施報告

令和6年3月14日

団体名 NPO人にやさしい色づかいをすすめる会

事業名 カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業

1. 事業の内容

(1) 事業の目的

愛知県内の自治体職員が、カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊による出前講座を通して色覚の多様性について理解を深め、カラーユニバーサルデザインの必要性を認識するとともに、自らカラーユニバーサルデザインを実践・推進する戦力となることを目的とする。

(2) 実施内容

以下5市の市町村職員および県職員を対象に2023年12月7日～2024年2月14日の3ヶ月間に計5回、約2時間の講座「カラーユニバーサルデザイン推進支援講座」を実施した。

令和5（2023）年度 カラーユニバーサルデザイン推進支援講座一覧

実施日時	参加人数	会場
2023年12月7日（木） 13：00～15：00	18人	豊田市役所の東大会議室4 豊田市西町3丁目60番
2024年1月9日（火） 14：00～16：00	19人	日進市役所庁舎内会議室 日進市蟹甲町池下268番地
2024年1月16日（火） 14：00～16：00	20人	知多市役所多目的会議室 知多市緑町1番地
2024年1月18日（木） 13：30～15：30	19人	長久手市役所会議室 長久手市岩作城の内60番地1
2024年2月14日（水） 14：00～16：00	18人	尾張旭市役所3階講堂1・2 尾張旭市東大道町原田2600番地1
合計	94人	

カラーユニバーサルデザイン推進支援講座は、前半を講義、後半をワークショップとする二部構成で実施した。冒頭に主催者側の挨拶があり、途中10分の休憩を挟むため、それぞれ50分ずつの時間配分として計画しており、1市を除き、ほぼすべて時間通りに滞りなく開始・終了した。1市の例外は日進市で、ここでは講座の最初に自治体担当者の挨拶に続き、健康福祉部地域福祉課職員によ

る20分程度の講義（「障害を理由とする差別の解消の推進について」）が行われた。

次いで講座内容を簡単に報告する。前半第一部の講義では、スライド資料をスクリーンに映しながらか色覚の多様性とカラーユニバーサルデザイン（以下CUDと称す）の実践的な手法について解説した。色覚の多様性とCUDの必要性を理解してもらうには教科書的な説明だけでは十分ではないため、講義の半ばに色弱模擬フィルタをかけて色紙を分類し色の見分けにくさを実体験するワーク、さらに色覚タイプの異なる色弱当事者2人が個人的な体験や色覚に関する私見を語る談話も挿入した。

なお講師がスクリーンに映写するスライドを参加者全員に資料として配布し、より深い理解を促すとともに、CUDの実践にとって有用性の高い情報提供を行った（スライド資料の、参加者全員への紙媒体での配布とデータの事前配信は、昨年度までに同事業に対して行ったアンケート調査で要望が多かったこともあり、今年度より実施した）。一部の主催者から、たいへんわかりやすい資料であるため、講座に参加しなかった職員にも提供したいとの要望があったことから、スライドの資料的価値の高さが伺える。本事業4年目にして、講義内容をさらに充実・洗練させてきた成果と考えられる。

後半第二部のワークショップでは、以下の6つの異なるプログラムを用意して募集したところ、豊田市がプログラムF、日進市がプログラムD、その他3市がプログラムAを選択した。需要はなかったものの、その他のプログラムもCUDへの対応を考えるヒントとなる内容であり、選択肢のバリエーションとしては妥当な設定であろう（実施した3つのプログラムの内容については後述する）。

- ・プログラムA：受講者が持参した印刷物のチェック
- ・プログラムB：受講者から提案されたCUD的課題をめぐるディスカッション
- ・プログラムC：市役所（研修所）館内のCUDチェック
- ・プログラムD：CUDの知識とスキルをいかに他者に伝えるかを学ぶワーク
- ・プログラムE：ロールプレイで学ぶ色に頼らないコミュニケーション
- ・プログラムF：Officeツールを用いたCUD対応文書作成ワーク

豊田市が実施したプログラムFでは、受講者が各自のPCを用いてCUDチェックツール（ウェブアプリケーション）の使用方法を覚えてもらい、PowerPointで見分けやすい色づかいを考案してもらった。インターネット環境が十分でなく、ウェブアプリケーションにアクセスするまでに時間を要し、なかには全くアクセスできずにワークを終えた受講者もいた。インターネット環境およびデバイス利用制限の問題は、PC使用のプログラムでは避けがたく今後の課題でもある。

日進市が実施したプログラムDでは、3～4人のグループに分かれ、1人がCUDの知識を他者に伝える役割（教師役）を演じ、他の聴き役が説明の仕方や内容を評価することをローテーションし、全員が教師役となるように繰り返してもらった。講座前半で学んだ説明に独自の比喻や事例を加えながら、丁寧に順序だてて説明する姿が多く見られた。

3市（知多市、長久手市、尾張旭市）が実施したプログラムAでは、受講者が持ち込んだ広報誌やイベントのチラシ、ポスター、公共施設のリーフレット、防災関連マップ、ごみカレンダー等、自らが作成・発行した印刷物をグループに分かれて見直し、改善すべき点などをまとめてもらった。いずれの市でも、色弱模擬フィルタや色弱者の色の見分けにくさをシミュレートするスマートフォンアプリを駆使し、印刷物を囲んで熱心にグループで議論する姿が見られた。

以上3つのプログラムすべてにおいて最後に気づきを全体で共有する時間を設け、講座全体のま

とめとした。より具体的な講座内容は、「カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業」完了報告書に添付した講義用スライド資料（資料2）とアンケートおよびワークシート集計結果報告（同資料3）、5会場の様子を撮った記録写真（同資料4）を参照されたい。

講座の時間については、1コマの研修として2時間は適切であった。冒頭と終了時に主催者の挨拶や事務連絡が入り、10分の休憩を挟むと実質講義50分、ワークショップ50分となり、実施したわれわれの立場からすると、かなりタイトな進行を強いられた感があった。アンケート回答を見ると、「長かった」との回答はゼロ、「少し長かった」は92人中5人（約5.5%）、「ちょうどよかった」は75人（約82%）、「少し短かった」は9人（約10%）そして「短かった」は3人（約3%）であり、大半の受講者にとって2時間は適切な時間であったことがわかった。

「少し長かった」との回答はいずれも日進市のものであり、講座の前に20分近い別テーマの講義をプログラムに入れたことが影響している可能性がある。さらに後半のワークショップでCUDの説明を早々に終えて手持無沙汰な様子のグループが1つ見られ、時間を持て余した受講者の評価も入っているかもしれない。

運営については、キャラバン隊事業も4年目となり要領を掴んでスムーズに動けるようになり、各自治体担当者の協力もあって、すべて滞りなく進めることができた。昨年、講師持参のPCと講座会場のプロジェクトとの接続がうまくいかず開始時間が遅れたトラブルがあり、その教訓としてPCは自治体を用意したものを使用することとし、スライドのデータも事前に送り、講座開始までに動作確認をするよう徹底した結果だと言える。

2. 参加者状況

参加者は5会場で計94人であった。上掲表の通り、その内訳は豊田市が18人、日進市が19人、知多市が20人、長久手市が19人、尾張旭市が18人である。事業計画段階では、1会場につき定員を50人として30～40人程度の参加を見込んでいたが、5市ともに20人程度の小規模開催となった。少人数ならではのメリットは、参加者と講師の距離が近くなることであり、ワークショップでひとりあたりの対応時間が長くなる等、今回もそれがよく表れていた。

参加者の講座に対する感想や評価は、講座終了時に実施したアンケート結果報告に詳しく示しているのので、そちらを参照されたい（「カラーユニバーサルデザイン普及キャラバン隊事業」完了報告書に添付した資料3）。ここでは、講座の有益性を問うた質問への回答集計結果と、自由記述のなかから数件を紹介したい。

「今回の推進講座は、あなたにとって有益でしたか」に対し、「ひじょうに有益だった」の回答は92人中83人（約90%）、「まあまあ有益だった」は8人（約9%）、「普通」はゼロ、「あまり有益ではなかった」は1人（約1%）、「意味がなかった」はゼロであった。「あまり有益ではなかった」とした回答者は豊田市の受講者であり、これはワークショップでPCが使えないまま時間切れとなった方の回答ではないかと推察される。PC使用にはインターネットに接続しパスワード認証が必要であり、それができないと困っておられた方が実際に1人いた。この1%を除くとネガティブな意見は皆無で、「ひじょうに有益だった」と「まあまあ有益だった」を合わせて99%となった。昨年度は「ひじょうに有益だった」が82%、「まあまあ有益だった」は15%であり、両者の割合からすれば今年度はより高い評価を得たと言える。

次にアンケートの自由記述から、講座の内容や受講者の反応が伝わるものをいくつか紹介する(開催した会場順)。

- ・実際に自分で使っているチラシをCUDチェックすることで、どのような問題があったかなど学ぶことができてほんとうによかった。
- ・色弱の場合の色の見分けにくさを体感することができてよかった。見え方のチェックツールを紹介いただけだったので、今後の業務に活用したい。“色にたよらない表現”という言葉も印象に残った。意識して広報物の作成をしたい。
- ・以前に障害福祉の分野に携わっていたため、少し知っていることはあったものの、実際に色弱者の方の視界を体験したり、話を聞いたことで普段の業務等で配慮が足りていなかったことが分かった。当事者の実体験を聞くことができて良かった。
- ・今回研修で学んだ内容を子どもたちに伝え、世の中に浸透することが重要だと感じました。
- ・色覚の多様性について、色の見分けがつきにくい方の人数が想像よりもかなり多いことを知り、CUDの重要性について大きな気づきがありました。日常の情報表示はかなりの部分について色に頼っている印象で、単なる生活の不便にとどまらず、例えば災害時などには生死を分けることも想定できます。行政は重要度の高い情報伝達を担う機関でもあるため、CUDに対する関心と理解に加え、具体的な取組みが強く要請されるのではないかと感じた。
- ・自治体でのカラーユニバーサルデザインの推進率がどの程度あるのか気になります。推進している自治体はチェック体制をどのようにしているのでしょうか。
- ・バリエーションで色紙を5分類する体験はとても面白く勉強になりました。私は高齢者向けの印刷物をつくることが多く、これまでの白黒でも見やすいように意識してきましたが、白内障の方や色弱の方にとってもわかりやすいものとなるよう色の濃淡をつけてコントラストをはっきりするように気をつけたいと思いました。

3. 担当者の感想・まとめ

担当者全員で推進講座終了後に本事業全体の振り返りを行った。そこで出た感想・意見のうち今後の活動に道を示すものを5つ記し、まとめとしたい。

- ・受講者の多くが、過去3回のキャラバン隊事業と同様に、CUDの基礎を十分に理解され、誰にとってもわかりやすい資料を作りたいという思いを新たにされたように感じた。文字と背景の色に明度差をつける、文字サイズを大きく、太いフォントを使用する等、既に見えやすさに配慮して資料作りをされている方も多くおり、そこにCUDの確かな知識を今回の講座によって加えていただくことで、自治体が発する視覚情報のCUD化は着実に進んでいくと感じた。
- ・ワークショップでPCを使用すると、必ずと言ってよいほどインターネット接続のトラブルが発生しワークの進行が妨げられる。PC使用のプログラムを選択肢から外した方がよいとも考えられるが、OfficeツールでCUDに対応した文書や図表を、手順を追って作成していく実践的なワークの有用性はあると思う。
- ・ワークショップのプログラムを今回は6つ用意した(前年度は2つ)。自治体それぞれの要望にきめ細かに応えるためであったが、集客(受講への応募)に繋がることを期待してのラインナップ拡充でもあった。今回選択されたのは6つのうち3つだが、それによって上記の効果があつたかどうか

かは判断できない。これに関連し、本事業の主催者（福祉局福祉部障害福祉課）が集客に苦労されたと伺った。参加者総数が昨年から28人減で8割弱であったことも残念に思う。講座の対象を自治体職員に限定せず、もっと広く募ることも必要かもしれない。わたしたちが募集段階から関与できるような連携体制を築き、集客方法を考えていきたい。

- ・アンケートの自由記述の中に、白黒コピーすることで資料の見やすさをチェックする方法について言及したものが複数見られた。画面を構成する各要素の色彩に明度差があれば、どのような色覚のひとにも見分けやすく、白黒コピーすればそれがわかるという理屈は、たしかに単純明快で記憶に残りやすい。実際に多くの場合これは有効だが例外もある。たとえば、講義で使用したスライド資料のなかに、CUDに対応した配色として朱赤と青みの緑の組み合わせを紹介しているが、これを白黒コピーするとD型色覚（色弱の色覚タイプの一つ）の人には、ほぼ同じ色に見える。このような例外があることも、講義のなかできちりと伝えるべきだと感じた。
- ・ある自治体担当者から、講義のスライド資料がひじょうにわかりやすかったので、講座に参加しなかった職員にも配信したいとの要望があった。スライド資料は、講座に参加した方が講義の補助資料として見ることを前提に作成したものであり、それだけで完結した情報を掲載しているわけではないため、扱いには慎重さが必要。今後は、独立したCUDガイドブックかリーフレットを作成し、講義用に限定せず配布・配信できるとよいと思う。

以上、CUD推進支援講座の意義をわれわれ自身が自覚し、より効果的なあり方を再考する機会となった。

最後に、こうした貴重な機会を与えられたことに深く感謝申し上げます。

以上